

Nara National Museum

奈良国立博物館

だより

第78号

平成23年7・8・9月



重要文化財 釣燈籠(当館所蔵)一名品展「珠玉の仏教美術」より

特別展

天竺へ～三蔵法師3万キロの旅
7月16日(土)～8月28日(日)
東新館・西新館

特別陳列

初瀬にますは与喜の神垣
—與喜天満神社の秘宝と神像—
7月16日(土)～8月28日(日)
西新館

名品展

珠玉の仏たち
～9月11日(日)
なら仏像館

中国古代青銅器
～9月11日(日)
青銅器館(坂本コレクション)

珠玉の仏教美術
9月13日(火)～10月2日(日)
西新館
※新収蔵品展も同時開催

てんじく 天竺へ

三蔵法師3万キロの旅

7月16日(土)～8月28日(日)

三蔵法師として知られる玄奘三蔵は中国唐の時代の高僧です。真摯に仏の教えを求めた玄奘は、仏教誕生の地、天竺(インド)へと苦難を恐れずに旅立ち、天竺滞在ののち多くの経典を携えて帰国し、これを中国語に翻訳しました。その成果がその後、中国のみならず日本を含む東アジアの仏教に与えた影響ははかりしれません。

本展で展示される国宝「玄奘三蔵絵」(藤田美術館所蔵)は、その玄奘の生涯を全十二巻、全長総計百九十メートルを超える画面に絵画化した絵巻物です。偉大な事績を、軽やかな筆致と鮮やかな色彩で巧みに描き出した画家は、鎌倉時代後期に活躍した宮廷絵師・高



重文 玄奘三蔵像 東京国立博物館(展示7/16-8/15)

階隆兼一門とみられ、中世やまと絵のひとつの絶頂を現在に伝える点でもたいへん貴重なものです。本展はこの絵巻を核に、玄奘の偉大な足跡とその後世への影響をたどる試みです。

展示は四章で構成されます。第一章では「玄奘三蔵絵」全十二巻を公開し、巻替えを通じて全場面を心ゆくまでご覧いただきます。第二章は、奈良朝写経の名品である国宝「大般若経(魚養経)」三百八十七巻を一堂に展示し、玄奘がインドからもたらした仏教経典のポリウムを実感いただけます。第三章では、玄奘の事績が伝説化され、のちに『西遊記』が成立し、人々に親しまれてゆく過程を追います。第四章は、玄奘の旅の記録をもとに描かれた天竺の地図「五天竺図」を通じ、「玄奘三蔵絵」が制作された中世、日本人が憧れた天竺の姿を探ります。



国宝 玄奘三蔵絵 巻第三 天竺への旅を続ける玄奘 大阪 藤田美術館(展示7/16-8/7)



国宝 玄奘三蔵絵 巻第五 天竺で祇園精舎を訪ねる玄奘 大阪 藤田美術館(展示7/16-8/7)



国宝 玄奘三蔵絵 巻第十一 中国帰国後、大般若経の翻訳が完成すると、経典から光が放たれた 大阪 藤田美術館(展示8/9-8/28)



国宝 玄奘三蔵絵 巻第六 天竺で戒賢による瑜伽論の講義を受ける玄奘 大阪 藤田美術館(展示8/9-8/28)



五天竺図 奈良 法隆寺(展示8/9-8/28)



唐僧取経図冊 個人(展示8/16-8/28)



国宝 大般若経(魚養経) 大阪 藤田美術館

初瀬にますは与喜の神垣 — 與喜天満神社の秘宝と神像 —

7月16日(土)～8月28日(日)

万葉歌に「こもりく(隠口)の」の枕詞を冠して詠まれる泊瀬(初瀬)の地は、現在は西国第八番札所の観音霊場である長谷寺の門前町として知られています。その初瀬集落の最も奥まったところに鎮座するのが、菅原道真公をまつる與喜天満神社です。

この地に天神が鎮座したのは、天慶九年(九四六)のこととも伝えられますが、正確には分かりません。ただ、平安時代末以降、中世から現代に至るまで、長谷寺および初瀬の町を守護する神として長く信仰を集め、盛大な祭礼や種々の芸能がおこなわれてきました。本展は、この與喜天満神社にゆかりの宝物を通じて、その歴史と文化を紹介するものです。

特に注目されるのは、今回が初公開となる天神坐像です(図1)。



図1 天神坐像(與喜天満神社)



図4 神像(與喜天満神社)



図3 神像(與喜天満神社)



図2 神像(與喜天満神社)



図5 与喜天神祭礼図(長谷寺)

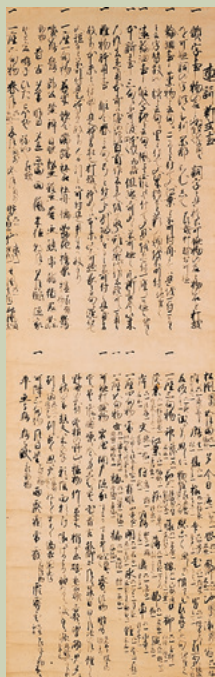


図7 連歌新式(長谷寺)

正元元年(一二五九)の墨書銘があり、年代の明かな天神像では現存最古のもので、加えて、本殿で天神の脇にまつられる六躰の神像(図2・3・4ほか)も展示します。また、神社の毎年の祭礼は、中世以来、天神の出現した九月二十日を祭日として、長谷寺僧も参列し地元を挙げて盛大に催行されてきました。江戸時代の祭礼図(図5)には、様々な服装の人達が参加する行列や、御旅所に安置される神輿、さらには連歌会や能の場面が描かれます。本展では、行列で使用された鍔(図6)や、神輿、連歌関係の資料(図7)を展示いたします。



図6 白糸威鍔(長谷寺)

新収蔵品展

9月13日(火)～10月2日(日)

奈良国立博物館のコレクションは、年々成長しています。収蔵品にふさわしい優品を見いだしては購入を行うほか、寄贈をお受けすることもあります。特に、近年寄贈はコレク



横山大観筆(当館) 絹本着色 武蔵野図

ション充実に欠かせない重要な柱になっております。この展覧会は、過去五年ほどの間でコレクションに加わった作品から、まだ展示されていない品を中心に公開します。

なら仏像館・青銅器館 臨時休館のお知らせ

9月13日(火)～10月2日(日)の間、大規模な展示替えのため、なら仏像館と青銅器館を臨時休館いたします。ご迷惑をおかけしますが、何卒ご理解のほど、お願い申し上げます。

なお、この期間、西新館は通常どおり開館し、「新収蔵品展」および「名品展 珠玉の仏教美術」を開催いたします。

仏教美術資料研究センターの再開によせて

—奈良県物産陳列所と奈良の近代—

宮崎幹子（当館学芸部資料室長）

奈良国立博物館に「仏教美術資料研究センター」という施設があるのをご存知であろうか。そこでは当館が展覧会や文化財調査を実施する過程で収集した、仏教を中心とする歴史と美術にかかわる学術資料―図書、雑誌、報告書、展覧会カタログ、画像資料など―を整理・保管し、公開をおこなっている。センターの設置は昭和五十五年、現在の建物の開館は平成元年。国内で設置された本格的なミュージアムライブラリー（博物館図書館）としては最初の部類に属する。

センターは一昨年十月より建物の耐震改修工事のため休館していたが、工事が無事完了し、今夏再開の運びとなった。担当者としては図書館としての歴史と意義をここでアピールしたいところだが、実はこの建物が近代和風建築を代表する重要なものなので、図書館の宣伝は別の機会を俟つこととして、今回は建築を話題として取りあげたい。

本建物は関野貞（一八六七―一九三五）の設計により明治三十五年に竣工した。関野は帝国大学工科大学造家学科（東大工学部建築学科の前身）出身で、建築史のみならず、美術史、考古学、そして古社寺建造物修理事業の黎明期においても大きな足跡を残した人物である。法隆寺再建・非再建論争、平城宮大極殿址の発見でその名を記憶する人もいるだろう。しかし関野の設計にかかる現存唯一の建築が当館にあることを知る人は少ない。

明治二十九年、二十九歳の関野は土木工事監督嘱託として奈良に赴任し、翌年奈良県技師に任命され、同年制定された古社寺保存法のもと県下古社寺の保存修理に奔走する。赴任から明治三十四年に東京帝国大学助教授着任のため帰京するまでの間、新薬師寺本堂、法起寺三重塔をはじめとする八棟の建造物の修理を監督した。奈良



仏教美術資料研究センター
（重要文化財 旧奈良県物産陳列所）

での多忙な日々を過ごす中で、日記によると明治三十年から三十二年の間に本建物の設計をおこなっている。

本建物は木造漆喰壁、屋根は棧瓦葺とし、父母屋造の中央楼から東西に胴家を延ばし、端に

宝形造の翼楼をおいている。対称性を強く意識した優美な姿は平等院鳳凰堂にも例えられる。関野は処女論文以来ながく鳳凰堂を研究しており、そうした思い入れを自らの設計にも取り入れたようである。

興味深いのは、関野が古社寺修理を担当する過程で得た細部の様式に関する知見が、建物の多数取り込まれている点である。特に幕股に関しては古代から中世にかけての各時代に特徴的な形状をみることができ、中央楼の高欄下にみえる人字形割束は、法隆寺金堂や中門によく似た形であるが、その割束が奈良時代から鎌倉時代にかけて展開したとされる板幕股、本幕股が各楼の破風に据えられる。

例をあげると、キノコを逆さ向きにしたかのような翼楼昇降口の板幕股は、新薬師寺南門（鎌倉時代）を直接写している。明治三十年、関野は最初の修理として新薬師寺本堂を手掛けており、実に目の前の建物からの引用であったことが分かる（奈良文化財研究所清水重敦氏からのご教示による）。

関野は細部の観察に基づき建築の造立年代を判定する、という近代の研究方法を確立したが、その成果がこの建物にも存分に取り入れられている。まさに関野の古建築研究とともに誕生した、といえるだろう。



翼楼昇降口 板幕股

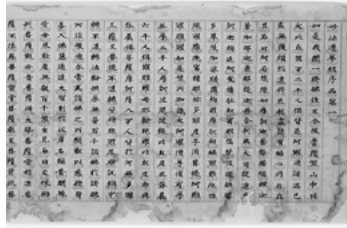
本建物は、奈良県物産陳列所として開館したが、その後、奈良県商品陳列所（大正十年）、奈良県商工館（昭和九年）と名称を変える。それに伴い活動内容も、事業者の殖産興業を目的とした参考品の陳列、県下物産の展示即売、そして一種の観光拠点へと少しずつ主軸を移してゆく。外観の特徴に加えて今回強く興

味を覚えたのは、この建物の内観がまぎれもなく「陳列所」であったという事実である。二層吹き抜けの内部、仕切り壁を立てない広々とした空間、腰高に設けられた窓、クリアストリー（採光窓）、これらは何れも展示空間の確保と自然光を取り込むことを意図している。明治中期から昭和初期にかけて全国に多数の陳列所が建造されたが、多くは近代の終焉とともに役割を終え、姿を消していった。現存する数少ない陳列所としても、本建物の存在意義は大きい。

その後、昭和二十七年に奈良文化財研究所の事務庁舎となり、さらに当館へ管理換される過程で二回の改修を経ているが、それにより展示空間の面影は失われていた。この度の工事により西胴家の天井が取り払われ、中央楼から見上げるクリアストリーは、実に五十九年ぶりにその姿をあらわした。今回は「文化財の復原」という新たな意味を付加された改修であったが、本建物の百年を越える歴史をふりかえると、建築はその機能とともに少なからず姿を変えてゆくという事実を改めて感じる。内部の装いを新たにした本建物は、引き続き仏教美術資料研究センターとして活用され、更に新しい歴史を刻んでゆくこととなるが、奈良の近代を体現する証しとしても、この建物が広く記憶されることを願っている。



蓮華形柄香炉 (真光寺)



●一字蓮台法華経 (龍興寺)



鬼瓦 (大安寺出土) (個人)



●俱舍曼荼羅 (東大寺)

珠玉の仏教美術

9月13日～10月2日
西新館

名品展

【絵画】

- 俱舍曼荼羅 東大寺
- 浄影大師像 東大寺
- 嘉祥大師像 東大寺
- 香象大師像 東大寺
- 聖徳太子勝鬘経講賛図 法隆寺
- 清凉法眼・雲門大師像 天龍寺
- 夢窓疎石像 妙智院
- 大道一以像 当館
- 白衣観音像 (約翁徳俊賛) 当館
- 水月観音像 (天庵妙受賛) 当館
- 牧牛図 当館
- 文殊菩薩像 当館
- 文殊菩薩及び普賢菩薩像 妙顕寺
- 嚴子陵及び虎溪三笑図 妙心寺
- 薬師寺縁起 薬師寺
- 植槻道場縁起 植槻八幡神社

【書跡】

- 瑜伽師地論 卷第八十九 (舎人国足願経) 当館
- 増一阿含経 卷第三十 (善光朱印経) 正暦寺
- 一字蓮台法華経 卷第一 龍興寺
- 紺紙金字法華経 興聖寺
- 大般若経 卷第四百二 (源豪一筆経) 当館
- 金剛般若集験記 当館
- 不動護摩次第 当館
- 伝教大師略伝 園城寺
- 浄藏法師伝 当館
- 常行三昧堂念仏私記 談山神社
- 常行三昧堂大過去帳 談山神社
- 多武峯年中行事 談山神社

【考古】

- 土偶 (山形・杉沢遺跡出土) 当館

土偶祭祀用品(青森・岩手県出土) (小野コレクション) 当館

銅鐸(愛媛四国中央市出土) 当館

天神山古墳出土土品 妙国寺

珠城山古墳出土土品 当館

蓮華文鬼瓦(奈良県奥山久米寺出土) 京都国立博物館

蓮華文鬼瓦(奈良県山形村廃寺出土) 個人

鬼神文鬼瓦(奈良県薬師寺出土) 京都国立博物館

鬼瓦(伝奈良県大安寺出土) 個人

鬼瓦(奈良県秋篠寺出土) 個人

鬼瓦(愛知県社古窯出土) 個人

粟原寺伏鉢 談山神社

中宮寺塔心礎上面出土土品 中宮寺

元興寺塔跡出土鎮壇具 元興寺

靈安寺塔跡出土鎮壇具 当館

佐井寺僧道薬墓出土土品 当館

山代忌寸真作墓誌 当館

出雲荻野古墓出土土品 当館

青磁鉢 正暦寺

陶製経筒(愛媛県松山市出土) 当館

銅板経(大分県長安寺経塚出土) 長安寺

瓦経(福岡県飯塚山経塚出土) 当館

青石経(愛媛県大日堂経塚出土) 当館

泥塔経(鳥取県智積寺経塚出土) 当館

刺繍阿弥陀一尊図 当館

刺繍阿弥陀三尊図 真正極楽寺

刺繍阿弥陀如来像 個人

刺繍阿弥陀三尊像 中宮寺

刺繍種子阿弥陀三尊図 禅林寺

刺繍西界曼荼羅図 太山寺

刺繍善導大師像(厨子入り) 當麻寺念佛院

三具足 聖衆来迎寺

火舎 当館

火舎 当館

蓮華形柄香炉 真光寺

金山寺形香炉 個人

●釣燈籠 当館

燭台 当館

華瓶 当館

●仏餉鉢 金剛峯寺

礼盤 峯定寺

素文磬・磬架 当館

須弥壇 当館

散蓮華蝶文螺鈿卓 当館

三脚卓 当館

円机 当館

華鬘 個人

牛皮華鬘 峯定寺

●種子華鬘 当館

●刺繡三昧耶幡 当館

●輪宝羯磨文透彫幡 個人

●蓮華形磬 細見美術財団

●蓮華形磬 赤松院

蓮華形磬 慈眼寺

孔雀文磬 当館

孔雀文磬 当館

孔雀文磬 長谷寺

孔雀文磬 長谷寺

孔雀文磬 葉師寺

素文磬 細見美術財団

素文磬 聖林寺

素文磬 個人

●西新館 西休室室

春日塔跡出土土品(当館)

※●国宝、●重要文化財

※すべての展示において、内容を一部変更する場合があります。

【表紙写真解説】

重要文化財 釣燈籠

鉄製、鍛造の六角形の釣燈籠。灯火を入れる火袋部分に、梅、桜に酢漿、橘に沢潟、網地に藪、菊に籬、松に竹、斜格子に藪の各文様が順に右回りに表される。網地に藪、斜格子に藪の面はそれぞれ扉となっており、これを除く四面に四季の草花を配して、四方四季や四季の循環を表すものと想像される。植物の文様は、花や葉、枝などの部分を透かして地を残す透彫で表されており、その写実を追い求めず特徴を捉えて紋のように意匠化された表現は、灯火に揺らぐ影絵のような効果を企図したものかと思われる。

本品は、宝珠鉦や火袋上部の欄間部分に彫られた銘文から、永禄七年(二五六四)に会津の如法寺(福島県西会津町)の執金剛神に捧げられたものとわかる。仏教では、灯火は香、花とともにほとけを供養する上で最も貴いものとされ、燈籠を寄進し灯火を捧げることが盛んに行われた。銘文には願意は直接記されないが、数名の寄進者名が記されており、様々な暗闇(人間の迷い)を照らす(解消する)灯火(仏法・智慧)が灯されたことであろうと想像される。

一基 鉄製 鍛造 透彫 高四〇・七cm 室町時代 永禄七年(二五六四)

清水 健(当館学芸部研究員)

特別展「天竺へ～三蔵法師3万キロの旅」

8月 6日(土)「高僧伝絵としての玄奘三蔵絵」

若杉 準治氏(京都国立博物館名誉館員)

8月20日(土)「藤田傳三郎と藤田美術館

—玄奘三蔵絵をはじめとするコレクションについて—

前野 絵里氏・藤田 清氏(藤田美術館学芸員)

特別陳列「初瀬にまずは与喜の神垣

—與喜天満神社の秘宝と神像—

7月30日(土)「與喜天満神社の歴史と信仰」

野尻 忠(当館学芸部情報サービス室長)

8月27日(土)「與喜天満神社の神像について」

岩田 茂樹(当館学芸部長補佐)

時 間 各回とも午後1時30分～3時(午後1時に開場)

会 場 奈良国立博物館 新館講堂

参加費 無料

※入場の際には、該当する展覧会の観覧券もしくはその半券、友の会カードなどをご提示ください

定 員 194名(先着順)

※午後1時より、講堂入口で入場券を配布します

● サンデートーク ●

7月17日(日)「鬼か龍か—統一新羅の鬼瓦—」

岩戸 晶子(当館学芸部研究員)

8月21日(日)「空海の伝えた仏画」

原 瑛莉子(当館学芸部研究員)

9月18日(日)「法然上人周辺の絵画」

北澤 菜月(当館学芸部研究員)

10月16日(日)「茶室・八窓庵をのぞいてみましょう」

吉澤 悟(当館学芸部教育室長)

11月20日(日)「二鉢の僧形坐像

—その像主をめぐる—」

岩田 茂樹(当館学芸部長補佐)

12月18日(日)「写経生の労務管理」

野尻 忠(当館学芸部情報サービス室長)

時 間 各回とも午後2時～3時30分(午後1時30分に開場)

会 場 奈良国立博物館 新館講堂

参加費 無料

定 員 194名(先着順)

◆キャンパスメンバーズ

当館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。

会員大学等の学生および引率教職員は名品展については無料、特別展については400円で観覧できます(共催展の場合は別途定めるものとします)。学生証(引率教職員は身分証明書)の提示をお願いいたします。

〈会員大学等〉

大阪成蹊大学芸術学部、大阪大学、関西大学・関西大学第一高等学校・関西大学北陽高等学校・関西大学高等部、京都外国語大学・京都外国語短期大学、京都教育大学、京都工芸繊維大学、京都嵯峨芸術大学・京都嵯峨芸術大学短期大学部、京都精華大学、京都大学、京都橘大学、京都伝統工芸大学校、京都文教大学・京都文教短期大学、近畿大学文芸学部・近畿大学大学院文芸学研究科、実践女子大学・実践女子短期大学、就実大学人文学部、帝塚山大学・帝塚山高等学校、天理大学、同志社大学・同志社女子大学・同志社高等学校・同志社香里高等学校・同志社女子高等学校・同志社国際高等学校、奈良教育大学、奈良県立大学、奈良工業高等専門学校、奈良佐保短期大学、奈良産業大学・奈良文化女子短期大学・奈良文化高等学校・奈良学園高等学校・奈良学園登美ヶ丘高等学校、奈良女子大学、奈良先端科学技術大学院大学、奈良大学、佛光大学、龍谷大学・龍谷大学短期大学部(五十音順)(平成23年7月1日現在)

「玄奘三蔵とシルクロード」

開催日：平成23年8月23日(火)～25日(木)

◆8月23日(火) 9:30～受付 10:30～主催者挨拶
10:50～講座

①「玄奘三蔵はるかなる旅—唯識思想を求めて—」

吉村 誠氏(駒沢大学仏教学部准教授)

②「奈良時代における大般若経(玄奘訳)の受容

—藤田美術館・薬師寺ほか所蔵の大般若経(魚養経)を中心に—

野尻 忠(当館学芸部情報サービス室長)

③「日本中世における玄奘の位置」

市川 浩史氏(群馬県立女子大学文学部教授)

◆8月24日(水) 9:10～受付 9:30～講座

①「玄奘の将来図像と東アジアの仏教美術」

稲本 泰生(当館学芸部企画室長)

②「玄奘がみたインドの仏」

小泉 恵英氏(九州国立博物館学芸部企画課長)

③「玄奘の見た未知なる仏教世界—中央アジアを中心に—」

入澤 崇氏(龍谷大学文学部教授)

④「玄奘取経伝説と明恵上人」

磯部 彰氏(東北大学東北アジア研究センター教授)

◆8月25日(木) 9:10～受付 9:30～講座開始

①「玄奘の画像と伝記絵」

米倉 迪夫氏(元上智大学国際教養学部教授)

②「憧憬の天竺—玄奘三蔵絵の世界」

谷口 耕生(当館学芸部保存修理指導室長)

※講座終了後、午後6時まで 奈良国立博物館にて特別展・特別陳列・名品展を自由見学

主 催：奈良国立博物館・奈良女子大学

会 場：奈良県文化会館国際ホール(近鉄奈良駅より徒歩5分)

*前回までと会場が異なります。ご注意ください。

◆受講料：3,500円

◆定 員：900名

◆応募方法：往復はがきによる、郵送に限ります。

*往復はがきに「夏季講座参加希望」と書き、[氏名・住所・郵便番号・電話番号・性別・年齢]を明記してください。奈良国立博物館友の会カードをお持ちの方は、カード番号も書きください。

*返信用はがきには宛名を記入してください。

*はがき1枚につき申込者1名としてください。

*定員の8割を超えてから応募された場合は抽選を行います。

◆応募締め切り：7月20日(水) 必着

*受付の可否を7月29日(金)までに連絡いたします

申し込み先：〒630-8213 奈良市登大路町50 奈良国立博物館 教育室
問い合わせ先：教育室 電話 0742-22-4464 FAX 0742-22-7221

*ホームページでもご覧いただけます。 <http://www.narahaku.go.jp/>

仏教美術資料研究センター 再開のお知らせ

仏教美術に関する図書や画像資料を収蔵しております当館の「仏教美術資料研究センター」は、耐震改修工事にともない平成21年10月より休館しておりましたが、このたび開館の準備が整いましたので、平成23年8月3日(水)より一般公開を再開いたします。

公開日：毎週水・金曜日(祝日、年末年始は休館)

時 間：午前9時30分から午後4時30分まで

※春日大社参道沿いの南門よりご入館ください。

◆奈良国立博物館賛助会

平成23年6月1日現在、一般会員(個人)37名、一般会員(団体)20団体、特別会員4団体、特別支援会員4団体のご入会をいただいております。新しく加入された方をご紹介します。

【一般会員(団体)】株式会社 グラスパウハーン・ジャパン様
(平成23年5月ご入会)

重要文化財
 地蔵菩薩立像
 奈良 東大寺所蔵 快慶作
 1軀 木造 彩色・金泥塗・截金
 像高90.1cm
 鎌倉時代(13世紀)

東大寺公慶堂に伝来した地蔵菩薩像。左手に宝珠を載せ、右手に錫杖(亡失)を執る通形の像ながら、湧雲上の蓮華座に乗る点に特色がある。この乗雲の地蔵菩薩は、春日三宮の本地仏としての地蔵が衆生救済のために来迎する姿を表すと考えられ、奈良地方を中心に彫刻・絵画の類品が多く存することから、中世南都において広く信仰を集めたとわかる。

本像は右足柄に陰刻された「巧匠法橋快慶」の銘記により、仏師快慶が法橋位にあった建仁3年(1203)11月30日から承元4年(1210)7月8日の間の制作と知られる。切れ長の目をもつ秀麗な顔立ちや整然と配された衣文は、快慶が追求した形式美の極致をしめしており、ここに写実的表現と形式的整理とが見事に融合した快慶様式の完成をみることができる。

宝永3年(1706)落慶の公慶堂に安置される以前の所在は不明ながら、本像のすぐれた出来映えや入念な表面仕上げは、東大寺にとりわけゆかりの深い人物の関与を思わせる。X線写真で確認された卷子等の像内納入品に、その謎を解く鍵が隠されているかもしれないが、現時点では造立時期が建永元年(1206)の重源逝去と重なることに注目しておきたい。

本展を最後に、長らくなら仏像館(旧本館)の主演として我々を魅了し続けてきた東大寺の仏像の大半が寺へと戻る。本像のほか誕生釈迦仏立像、試みの大仏(弥勒如来坐像)、西大門勸額など、いずれも展示室を華やかに彩ってきた馴染みの顔ばかりであり、返還を前にこれらを一挙公開することにした。なら仏像館と東大寺の諸像が重ねてきた年月に思いを馳せながら、当館での最後の展示を心ゆくまでお楽しみいただきたい。

◆なら仏像館にて、
 7月5日から9月11日まで展示



山口隆介(学芸部研究員)

名品展の
 みどころ

重要文化財
 清涼法眼禪師像・雲門大師像
 京都 天龍寺所蔵 馬遠筆
 2幅 絹本着色
 各縦79.2cm 横32.9cm
 中国 南宋(13世紀)



清涼法眼禪師、法眼文益は唐末五代に形成されていった禪宗五家のうち法眼宗の祖。雲門大師、雲門文偃は同じく雲門宗の開祖である。現在は対幅だが他にもう一幅、曹洞宗の祖である洞山良价を描く幅が東京国立博物館に所蔵されており、もとは各々五家の祖師を描く五幅セットであったとおおむね考えられている。

描いたのは馬遠である。高度に洗練された、細密で美しい絵画を生み出した南宋宮廷画家の代表格として、中国はもちろん日本での知名度も早くから高い。上方の賛は馬遠の強力なパトロンとみられる楊后(南宋寧宗の皇后、1172~1232)の筆で、両祖師の間答を踏まえた賛詩を記す。南宋宮廷の禪宗への傾倒を前提に生まれた絵画といえよう。

構図や線描に馬遠画風の特徴が表れているが、一見すると構成要素の少ない簡潔な絵である。しかし一歩歩み寄ってよく眺めると、余白と思われたところにかすかに色が挿してあり、画中に空間が広がっていることに気付く。雲門幅(左)の背後は向かって右の遠山の脇にうっすら山の輪郭がひかれ、そこに朱い陽光が淡く映じている。つまり二人は低地の、背後に高い山が見える場所にいる。一方の清涼幅(右)は二人の脇辺りの左右低い位置になだらかな山稜の線があるので、両者が立つのは奥の開けた場所とわかる。二つの画中には全く異なる空間世界が広がっている。

馬遠作とされる絵画はその名声ゆえ多数存在し、中には馬遠の腕前を疑わせる作品もある。しかし本図は簡潔な画面の細部に神経が行き届いていて、鑑賞者をうならせる。馬遠その人の筆に最も近いと認められる逸品、この機会にぜひゆっくり味わっていただきたい。

◆西新館にて、
 9月13日から10月2日まで展示

北澤菜月(学芸部研究員)

開館日時(7月~9月)

■開館時間

平常時(7月1日~15日および8月30日~9月30日)

午前9時30分~午後5時

※毎週金曜日は午後7時まで

特別展「天竺へ」会期中(7月16日~8月28日)

午前9時30分~午後6時

※毎週金曜日・土曜日および8月2日~8月21日は午後7時まで

※いずれも入館は、閉館の30分前まで

■休館日

毎週月曜日

※月曜日が祝休日にあたる場合は開館し、

翌火曜日が休館になります

※8月15日は月曜日ですが、開館します

観覧料金

特別展「天竺へ~三蔵法師3万キロの旅」

	一般	高校・大学生	小・中学生
個人(当日)	1,200円	800円	500円
団体・前売	1,100円	700円	400円

※団体は20名以上です。※前売券の販売は7月15日(金)まで

※障害者手帳をお持ちの方(介護者1名を含む)は無料です。

特別陳列・名品展

	一般	大学生
個人	500円	250円
団体	400円	200円

※高校生以下および18歳未満の方、満70歳以上の方、障害者手帳をお持ちの方(介護者1名を含む)は無料です。



〔交通案内〕近鉄奈良駅下車徒歩約15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

※当館には駐車スペースがございませんので、最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用ください。

